抄』にも『守護国家論』と同様な表現があることに注意したい。特に『報恩抄』には、執筆時に日蓮聖人の座右に『守護国家論』があったのではないかと思えるような近似した表現が用いられている。

叙上のような考察によって、『守護国家論』を執筆した正元元年の時点ですでに日蓮聖人の基本的な仏教理解が確立されていたことが再確認できた。そして、その理念が『顕謗法鈔』『開目抄』『報恩抄』などの佐前・佐後の遺文へと継承されていることを指摘できると考える。日蓮聖人の宗教は文永八年の法難を契機として大きな深まりをみせることとなるが、仏教体系についての基本的な理念については佐前から佐後へと継承されているのであり、ここに日蓮聖人の生涯を一貫する仏教観が存在していることがわかる。このため改めて日蓮聖人初期教学の重要性が再認識されるのである。

法華経——この不思議な経典——

芹沢寛哉

決して大部とは云えない経典であるが法華経ほど読む人の心と態度によって異って評価される経典はあるまい。富永仲基等の実証的合理主義たちは、内容のない讃辞のみと評し、天台は全経典の中最勝なりと論究して居り、その中間には多くの見解がある。しかし日蓮聖人の如く、身心を法華経の故に捨てるは無上の喜びであるとまで、身読された経典は、他に見当らないであろう。日蓮聖人には遙かに及ばないのは当然としても以下私の思索体験から読んで得た法華経観であるが、それでも余りに多くの内容が含まれているのを感じ、この一部の経典に対し、驚きを禁じ得ない。

一、法華経の宗教

法華経は宗教経典であるが決してそれだけではない。しかし日蓮聖人の観心本尊抄の、法華を識る者は世法を得べきか、の意に沿って法華経を理解するためには、法

華経宗教はいかなる宗教か、を明らかにすることから出発せねばならないだろう。法華経の宗教の特色を如来神力品の四句要法を手がかりとして要約すれば左の如くなろう。

一、統一性

法の統一。諸経典毎に多様に説かれている法を諸乗一仏乗として統一を図っていること。

仏の統一。三世十方無数の仏を久遠本仏の分身として統一せんとしていること。

人間の統一。二乗作仏、龍女成仏等に見る男女、階級等の差別を超えすべてに記別を与えることによって人の統一を図ること。

場所の統一。神力品。通一仏土に見る国土地区等の区別を超えた本国土の出現。

二、真理性。

時間的空間的能力的無限の絶対的対象と主観的真知の一致を明す信解とそれを論理化する無（否定）の活用。

超越的絶対への道と絶対者より相対的現実へ降下する道の双方向を示していること。

三、救済性

三界火宅から唯我一人能為救護の文により明白だが、救済は単に他力に非ず自力に偏せず、両者の綜合として受持信行の方法に特色がある。

四、神秘予言性

日蓮聖人が法華経を末法の明鏡として体認し、立正安国論を著されたことからも、その予言性を窺うことが出来よう。

五、絶対性転換性

無限普遍の世界は己心に収まり己心即三千に遍満する宗教の極致を説くと共に、絶対界は相対現実の特種世界へ実現する、法華を識る者は世法を得べきかはこの事を示している。

二、世法

法華の理法は社会的存在としての理法たる倫理道徳、また巧説諸法、常説法教化の実践は教育の精神原理、そして方法として展開され得るものである。これらすべてを含む広大深遠たる法華経は驚異不思議と云う外はない。